

Mojie West Chronicle

～京都ミュージックシーンの系譜～

<http://www.m21.or.jp/clubfame/mojoproject/>

phase 38 世界WORLD ②

めでたく5周年を迎えた陰では
今だから言える危機も経験した

先号でも既報のとおり、先頃、同店はめでたく5周年を迎えた。その節目に際して大幡なりニユアールを施しているが、それはメインフロアに関するものではない。「祇園からでも利用客を呼ぶように、クラブとしての居心地の良さを優先した」と言うように、パースベイスやVIPルームなど、ステージや多くのオーディエンスの居場所には、さほどタイレクトに干渉する場所ではない。「ライブをできるハコ」として、思うこともたくさんある。プロデューサーの中本幸一氏が語る「サウンドシステムにしても（ライブとDJイベントでは）似て否なるものではありますけれど、どちらの面も持っていないといけない、というか、そもそも居抜きでステージを組んだだけなわけですし、DJブースすら左右対称にできていないし、大所帯（のバンドなり出演者）になると、（スチーリングや機材的な意味の）バックヤードも必要です。本当はね、ライブもつとパンパンやりたいんです。それこそ大阪の「リキッドルーム」をライバルとして、名乗りを上げたぐらいなんです」という気持ちがあっても、である。サウンドシステムやステージという「イキップメント」ではなく、ラウンジやソファという「特別な居心地」を優先した。その理由は、これまでの5年におけるプロセスが影響しているような気がするのだ。

順風満帆のよう、に見える。だが「オープンした当初は、『次の月には潰れるかな』と本気で思っていました」という。よく聞く話ではあるが、それだけではなかった。とは言いがらも、軌道に乗せたことは間違いない。それでも、今だから言える（本当は言いたくないのかもしれないが書いてしまふ）危機もあった。

危うく燃えつきるところだった 何とか火を消したのは美学だった

「3年経った頃が危なかったんです。何もかも忘れてしまうかのように、脳目もふらずに走り続けて3年経って、ホッとして気が緩んでしまったのかもしれない。売り上げを落としましたですね。流暢に言葉を紡ぐ中本氏なのだが、このころの話になると言葉が出ない。何度も思い出そうに考えて、ようやく話が続く。「大阪ではDJのクオリティを期待されているわけではないんですね。店そのもののブランド力があっていいということもあります。『夜遊びの場所にクラブを選んでいいだけ』なんです。だから大阪のコンネクションで、大阪から出演者を呼んでやれば人は入るやろう、と、大阪の舞型に京都という街をはめれば何とかなるやろうという勘違いをしていた。京都には

京都のマーケットがあることを知らなかった。実際、3年間はその方法論で苦勞はしなかった。だがそのとき、実は継続まで危ぶまれる危機に面していた。「確かに感情的だったし、プラスアルファの努力をしなかったんですけど、結果的にちよつとした『燃えつき症候群』になったのかもしれない。そういう状態になると隣の芝が青く見えてきたりして、やっぱり東京なのかなとか、そういうことも考え出して、組織のトップがそういうことを考え出すと、組織の2番手、3番手にも伝播・感染していく。孤独をヒシヒシと感じるようになった。常々『終わるなら派手に終わろう』と想っていた。そこまで決意するところまで来ていた。

結果的に救われたのは、ブライドだったとも思う。ブライドと美学は同義だ。下がり調子で終わることを、美学が許さなかった。独りだった分、割り切ることもできた。「自分はまた何も生み出してない。底力を見せてやる」。外的理由から、内的理由から、吹いていたのは逆風で、その逆風がオープン当時を思い出させた。意気込みだけで書いた企画書もあった。次の月は潰れているかもしれないと本気で思った。それを乗り越えてきた記憶が、かろうじて同店を救ったと言える。

正しい「大切にすること」という行動は 予想以上の効果を伴って人に響く

その危機を越えたことで、変わったことがある。ブックキングラインである。無論、誰の手によるものであっても均一な仕事というのはベストであるが、それが組織である以上、担当する人物によってある程度のブレは出る。許容範囲内のブレであるならば、それは個性として褒め称えられるものにもなる。

3年目からは、ローカルを大切にしようになった。厳密に言えば、ローカルを大切にすることが変わった。京都には京都のマーケットがあることを知ったからだ。大阪という街でのローカルの大切にする方法を踏襲してきたが、それだけで走れる時期は終わったのだ。もとより同店が京都にあることや、木屋町にあることについては武器も弱点も知っていたわけである。店名が漢字であることもそうだし、それが例え物理的な理由であったとしても、中本氏はもつとがっつり絡んでいきたいと思っていたとしても、さまざま理由から「木屋町にいながら、木屋町とこれだけ一線を引いて仕事ができるのは凄いな」と頂戴する評もそのひとつだ。その根本が変わった。それを言葉にするのは難しいのだが、「地方でレギュラーイベントをやると飽きられる」。いつの頃からかは解らないが、そんな風評がある。縛られていたわけではないが、その風評を知らなかったわけでもない。それを、気にするのをやめた。

具体的な事例が、大沢伸一のレギュラーイベントだ。元来「頑なにレギュラーはやらない」で有名な人物である。その大沢

伸一が同店でレギュラー始めたのである。その翻意を生んだもの、それが同店の「ローカルに対する気持ちや思い入れの変化の度合い」であったろう。ギリギリ、言葉にできる範囲を書けばそういうことになるのだと思われる。東京まで出向き、三顧の礼で交渉を続けたことが「大切にしている行動」で、それに応えようという予想を超えた行動を生んだのだ。

好転が好転を呼び込む、その理由は 「人生、ラッキースパイラル（笑）」

不思議なもので、宗旨替えをしたら、京都以外からのオーディエンスが増えた。それがライブであれDJイベントであれ、同店における500名クラスの動員を数えるものでは、およそ5割が京都以外からであるという。

「これも先の話で、大阪だとゲストが外タレだろうとビッグネームだろうと、あまり関係なく来るんですね。いわゆる『だまたま（その日にイベントに来ていた派）』というのが多い。ところが京都の場合はスケジュールや、出演者の名前を必ずチェックしてから来る。最近ではそのセオリーに変化があるという。大阪から、スケジュールをチェックして来る人が多くなつたんです。『だまたま派』に比して、これは『わざわざ派』である。それが多くなつたということは、京都のセオリーが大阪に伝染しているということに他ならない。

「フライヤーを阪神エリアにも撒き続けたのが効いたのかどうかは解りませんが」。ともあれ、もとより京都だけでビジネスをしようと思っていたわけではなく、それどころか他都市からも集客を狙っていて、常に他都市との違いを意識してきた同店である。ここへ来て、それが叶いつつある。

大沢伸一に限らず「ロケットマン（ふかわりょう）」、「TOWA [Emma] KENZHI」... シーンのトップにいる人間が、隔月でも訪れるようになった。そういう人たちがウチのステ





「ジに立つ」として京都で？」ということになるんですけどね(笑)。曲に衣着せすに言えば、それは「どうして京都なんかで？」という失礼な疑問でもあるわけで、「誰もが無気に感じて」という一言では片づくまいが、変化の陰にはそれなりの理由があるものだ。それもいずれは伝わるだろう。「僕の人生はどこまでも続くラッキースパイラルですから(笑)」。

本誌では何度も紹介してきた昨年の大イベント「PPM 101」や、今年の「Art 2006 (別頁参照)」のメイン会場としても名を連ね、「野宮マキ」「Toto」「SILVA」といった、総じて言えば、中でもポピュラリティのあるゲストがこの「世界WORLD」でプレイしている。面白いことに、彼ら、彼女らのステージは、DJシステムを使うものの形としてはライブに近い。

コンサートホールから始まるか ディスコを起点にするものか

「ライブハウスとは？」という質問をぶつけてみると、面白い答えが返ってきた。「ライブハウスとクラブの比較になりますけど、元を正せば『コンサートホール』と『ディスコ』になると思うんですよ。営業時間も違うわけで、要はオールナイトかそうじゃないか。これもなかなか的確である。というか、少し考えれば解るのだが、木を見て森を見ないと見失いがちな事実だ。「ただ、世間では分け方もあるのでしようけれど、店としては僕は『同じでしょう?』と、オールナイトをやりたいというライブハウスもありますけど、すくなく近い存在なのに(そういう業態が確立していないだけで、『PPM』のイベントをしたときに、普段はライブハウスなりコンサート会場に行ってる人なんですよ)ね、その人からクラブって一人で打てるってことなんですか?という問い合わせが本気で入るくらいです(笑)。ライブハウスに比べるとクラブは怖いイメージはあるんですけど、だから両方を完璧にこなせる店ができたら伝説になると思う。これからハコをつくるなら、そんな店をつくりたい」と言っ。大沢伸一は「これからのDJイベントは、ほとんどライブセットになっていくだろう」という感想を述べている。ハコとして、ライブができるイクイップメントが必要になってくるということ。ライブハウスとクラブの境目が消えていくということでもある。

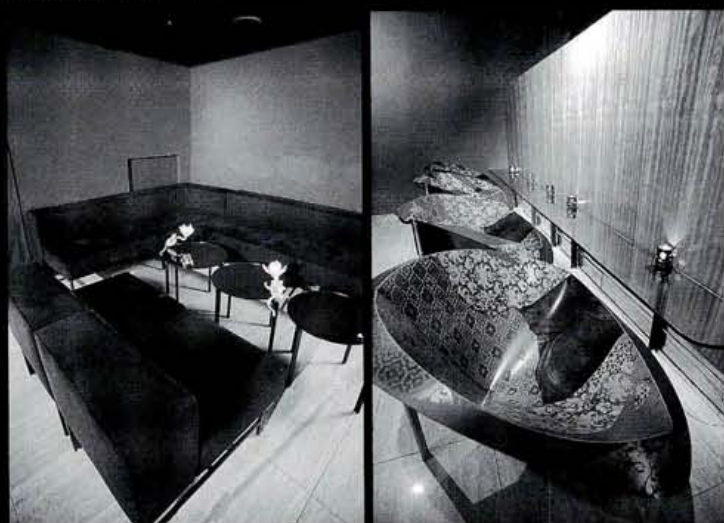
どこにでもあるべきだと思っから ここには必ず「音楽」がある

色んな「派」を取り込んで、同店はある。それがライブであってもイベントであっても、その屋台骨は変わらない。だからこれから望めることもある。「幸田来実」が来るならば、「大塚愛」や「矢井田瞳」や「B.B.Q.」を呼んでみても良いと思うのだ。それが来年でも、再来年でも構わない。5周年を機に行ったり

ニューアールを、6周年、7周年ではサウンドシステムに振って、その上で今の軸をブラさずにローカルを考えれば、ハコの実力を思えば全く可能だろう。「確かに、夢はナンボでも広がりますけど(笑)。確かに、5周年のイベントには『PPM』を呼ぶという案もあったんです。「旋破りの入場タダ」か、『PPM』かで迷った。でも徳単位の興行をする人を呼ぶと、ギャランティの件も含めてハコのサイズと心のサイズが合わないんです(笑)。結果、前者が採択された。

今はフッキングについても自分の好みには蓋をして、「イケイケどんどん」が音楽。「第一にお客さんの笑顔とテンション」であって、オーディエンスを喜ばせるためなら何でもやる。フロアの最前線に踊り狂う、DJにキーラを飲ませてみる。まわりがヒヤヒヤするくらいに、やり過ぎなほどにやっている。その形は京都、とりわけ木屋町的であるかもしれない。だが「最前線から一歩下がりたい」と思う気持ちはどこかにあっても、フライヤーを自ら街でまくことも含めて「現場を忘れては終わりだ」という薫陶と指針を信じて続けてきた。苦勞を共にした、いや、自分の苦勞を分かち合ってくれた人たちが、京都に来たときに会いに来てくれる。土地はどうあれ、マイナーからメジャーが上がっていったミュージシャンと、ライブハウス

の関係と同じだ。そしていつか、それなりの用意をして、次なるリニューアルが成ったとき、そのときは、こけら落としには個人的に大好きな「PPM」を呼べたら素敵だ。そう思っている。世間の評は、ライブハウスではないかもしれないが、ここにはきっと、音楽がある。



世界WORLD
 京都市下京区西木屋町四条上ル真町97
 イマージウム B1F・B2F
 075・213・4119
 22:00~翌5:00/不定休
 ※イベントにより変動。要問い合わせ。
<http://www.world-kyoto.com/>



'06 11.11 3大ギタリストの1人、E-クラブトンが3年ぶりとなる日本ツアーを大阪城ホールでスタート。初のトリプルギターを披露するなど、約1カ月で5都市、全18回(動員約20万人)のロングラン公演。
 '06 11.13 北朝鮮の核実験実施に対する国連安全保障理事会の制裁決議に基づき、政府は酒・たばこ・牛肉・トロ・自動車・キャビア・香水・時計・革製品など24品目の「ぜいたく品」の輸出禁止を決める方針を固め、北朝鮮の核開発に政府として強く圧力。